

## Ⅵ まとめ

佐々木 正 實

ストレートトーク番組出演者のプレゼンテーションの質を、いかにして高めることができるか、いくつかの仮説をたて、検証実験を行った。少ないサンプルについての実験であり、統計学的に立証されたというわけではないが、プロジェクトメンバーは、仮説の正しさについて、自信を深める結果となった。

特に強調したいのは、講師は、原稿を読んではいけないということである。鉄則といっても良い。だが、原稿を読まなければそれで良いかとういとそうでもない。頭の中で文章を作ることに気をとられながらしゃべってもいけないのである。良いプレゼンテーションには「勢い」が必要である。文を組み立てることに気をとられると「勢い」が無くなってしまうのである。

番組は、その論理構成が、しっかりしていなければならない。言うまでもないことである。しかし、論理構成は、番組全体を通してしっかりしていれば良く、部分部分について言えば、「もたつき」や「くりかえし」や「不完全な文章」であって構わない。「もたつき」や「くりかえし」や「不完全な文章」は、話し言葉の特徴である。ストレートトークは、「適度な話し言葉」で行うのが良いのである。

「項目を書いたメモを片手に」「数十人の聴衆が目の前にいるつもりになって」「立って自由に動きながら」「プレゼンテーションツールも自分で操作し」「時間管理の緊張からも開放されて」講義を行うとき、「話し言葉度」は、自然に適度になるであろう。そんなとき、講師は、ディレクターや台本にあやつられたロボットから、スタジオの真の主人公になっているに違いない。

今後、さらに多くの出演者について検証実験を重ね、仮説を確固としたものにしてゆく必要があることは、言うまでもない。また、実験を行った仮説は、わずか4つに過ぎない。その他の仮説についての検証作業も残された課題である。

我々は、プレゼンテーション能力を測定する尺度の作成に取り組んだ。仮説を検証するためには、突破しなければならない作業であった。生き物であるプレゼンテーションを構成要素に分解し、そのひとつひとつの要素についてパソコンを使って数量化し、さらに総合評価する、こうした無謀とも言える作業に挑んだ例は、始めてであろう。

この作業は、我々に、当初予想をしなかった副産物をもたらした。ひとつは、プレゼンテーション能力を評価・測定するには、どこに着目すべきなのか、なにを測定すれば良いのかが明らかになったことである。その結果、良いプレゼンテーションとはどんなものか、具体的にいくつかの項目を挙げて説明することができるようになった。

例えば、良いプレゼンテーションとは、

- その人の音域の中では高めの声で喋られる。
- 比較的早口である。

○一息でしゃべる分量が多い（息を長くしゃべる）。

○息の切れ目とセンテンスの区切りが、おおむね一致している。

ふたつめは、プレゼンテーション能力を高める方法に関してである。我々は、演出上の工夫によって、出演者の持つプレゼンテーション能力が自然に引き出されることをねらった。言わば、他力本願によって、より質の高いプレゼンテーションが実現されることを目指したわけである。だが、尺度作成の作業を行っているうちに、プレゼンテーション能力そのものを高める方法について明るい見通しが出てきたのである。研修目標が、見えてきたと言える。

例えば、

○やや高めの声で喋る訓練（心構え）

○やや早口で喋る訓練（心構え）

○あるまとまりは、一気に喋る訓練（心構え）

○完全な文章で喋ろうとしない訓練（心構え）

これまでのプレゼンテーションに関するハウツウものには、書かれていない訓練法であり、心構えである。今後は、こうしたプレゼンテーション能力を高める方法についても研究を広げてゆけるだろう。

開発したプレゼンテーション能力測定尺度は、試行錯誤の結果できあがったものである。作業は、衆目の一致した評価を出発点にした。例えば、誰もが認める良いプレゼンテーションを5とし、一番評価の低かったプレゼンテーションを1とした。そして、各レベルのプレゼンテーションが持つ音声的な諸特徴を測定して逆算的に尺度化したのである。プレゼンテーションを構成する各要素にどの程度の配点をすべきか、これが最もむづかしい作業であり、まさに試行錯誤のくりかえしだったのである。

できあがった尺度が、多様なプレゼンテーションを評価するに耐え、より精度の高いものにするためには、様々なタイプのプレゼンテーションについての測定を重ね、修正してゆくしかないであろう。更なる試行錯誤が必要なのである。

また、実験番組の検証にあたって、音声分析に意外に時間がかかってしまった。より手軽に測定できるように工夫してゆく課題が残されたのである。例えば、測定項目間の相関関係を明らかにすることができれば、いくつかの項目を落とし、わずかな項目を測定するだけでも、精度の高い結果が出せるかもしれない。いずれにしろ、この課題を乗り越えることによって始めて、尺度に実用価値が出ることになる。